

【林基金研究成果報告書】

イェーナ期のシェリング哲学における構想力概念の影響作用史研究
ーフィヒテ知識学からの受容と離反

八幡さくら

本研究は、イェーナ期のフィヒテ初期哲学における構想力概念を、シェリングの1800年前後の構想力概念と比較することで、シェリングの構想力概念の影響作用史とその独自性を明らかにすることを目的とする。研究対象は、フィヒテの『全知識学の基礎』(1794/95年)および『新しい方法による知識学』(1796-99年)と、シェリングの『超越論的観念論の体系』(1800年)および同一哲学期の著作(とりわけ1801年の『私の哲学体系の叙述』以降の同一哲学『哲学体系の詳述』(1802年)、『芸術の哲学』(1802-03年、1804-05年))である。

フィヒテは『全知識学の基礎』においてカントが批判哲学の構想力、とくに「生産的構想力」(die produktive Einbildungskraft)に注目する。フィヒテにおいて構想力は自我の自己定立における無意識的な生産活動であり、絶対的に反立するものを合一する働きを指す。フィヒテは構想力の認識能力としての理論的側面ではなく、産出的機能つまり実践的側面に注目している。フィヒテはこのような自我の無意識的活動である構想力は、それが意識へと至るまでの「人間精神の実際の歴史」(I/2: 365)の叙述を目指す。『基礎』において示された構想力の実践的機能は『新しい方法による知識学』においてさらに明確になる。フィヒテは生産的構想力に、自我の「自己規定作用」における根本的働きに見出す(IV/2: 224)。自我において構想力は働くと同時にそれを見るという直観作用である。

シェリングは自我を根本原理とするフィヒテの根本構想を受容しつつも、そこから離反していく。シェリングは『超越論的観念論の体系』において、自我という絶対的同一性を原理として主観と客観の根底に置く新しい哲学的立場を構築する。理論哲学から実践哲学、有機体論へとその哲学体系は進み、最終的に芸術哲学において自然と自由が統一される。構想力は自然と自由、没意識的なものと意識的なものを統一する力である。直観から自己意識へと至る「自己意識の歴史」において、構想力は「ポテンツ」の高昇化とともにその働きを進展させる(SWIII 331f.)。

シェリングの超越論哲学が自我から出発している点についてはフィヒテ知識学と類似しており、同時に構想力概念も以下の点で重なっている。1) 対立する二極間を浮動する働きであり、さらにそこから産出へと向かう能動性を持った生産的構想力は、カント認識論に基づく構想力と区別される。2) 自我において働く直観作用であり、それに基づいて人間精神の歴史が生じる。3) 理論的機能に限定されず実践的機能を持つ。

しかし、次の点に関してはシェリングの構想力はフィヒテのものから離れている。1) 自然哲学における自然の産出性と、超越論哲学における構想力が担う芸術の産出性との類比。主観(自我)を出発点とする超越論哲学は、客観(自然)から出発する自然哲学と真逆の方向性を持つ「並行関係」にある。それとともに芸術の産出性は自然の産出性と類比的に捉えられるが、芸術哲学と自然哲学を包括的に捉える視点はフィヒテにはない。2) 「構想力の美的作用」を認めるか否か。シェリングは構想力に対立するもの(没意識と意識、自然と自由)を統一し、芸術作品を産出する重要な役割を担わせる。シェリングによれば、芸術産出には「客観的になった知的直観」すなわち「美的直観」が働いている(SWIII 625)。それに対して、フィヒテが哲学に対して芸術を高く位置づけることも、構想力の美的作用を認める

こともない。

同一哲学期においてもシェリングが構想力を対立する二極間を浮動するという特徴を持ち、知的直観における作用として理解する点は変わらない。しかし、同時に構想力はあらゆる創造を支える「統合」(In-Eins-Bildung)と「個体化」(Individuation)の力として定義される(SWIV 394, V 386)。シェリングが構想力を「神的構想力」(die göttliche Imagination) (SWV 393) と名付け、神の創造性と芸術家の産出力を類比的に捉えるという点において、同一哲学期の構想力はフィヒテ知識学のみならず、超越論哲学や自然哲学のものからも異なっている。万物が同一性の観点から理解可能になるとともに、構想力は自我から絶対者の創造性の問題へと変容している。

本研究では、フィヒテからシェリングへの構想力概念の受容と展開の問題に集中することによって、両者の哲学体系の差異やその根本構想の違いを明示した。今後の課題としては、カントからフィヒテ、シェリングに至るまでの自我概念と哲学体系の変化は、各々の哲学内部で対立するものを媒介し、産出性を担う構想力の位置づけの差異に依っているということ、構想力概念史として描き出すことである。